

【論文】

「子宮系」とそのゆくえ

——現代日本社会における女性のスピリチュアリティ

橋 迫 瑞 穂

1. はじめに

近年、「スピリチュアル市場」のなかで、「子宮系」というジャンルが注目を集めている¹⁾。「子宮系」とは、女性の生殖器官である「子宮」に神聖性や神秘性を見出すことで、女性が自身の「女性らしさ」を獲得したり、生き方の方向性を決めたりするための「スピリチュアル」な諸々の事柄を含む総称である。

本稿は「子宮系」に注目して、それがなぜ広まったのかを検討するのが主題である。だが本論に入る前に、「子宮系」が広まった背景にある「スピリチュアル」について説明しておこう。「スピリチュアル」(spiritual)とは、精神とか霊性を指す言葉であり、特に欧米においてキリスト教に批判的な立場を取るニューエイジ運動や文化で重視されるようになったという経緯がある。Not religion, but spiritualという言葉にそのことが示されている。他方で、教会や教団などの組織に依拠しない宗教的な現象を分析、検討する際に、スピリチュアリティ (spirituality) という概念が使用されることがある。宗教学者の島藺進によると、スピリチュアリティとは「個々人が聖なるものを経験したり、聖なるものとの関りを生きたりすること、また人間のそのような働きを指す」と定義されている (島藺 2007: 5)。

「スピリチュアル」は消費社会との親和性が強く、一種の市場を作り上げていることも今日の大きな特徴である。日本では2000年代に入って「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原

啓之の登場により、「スピリチュアル・ブーム」が到来した。「スピリチュアル・ブーム」とは、ヨガやパワースポット、アロマ、前世、ヒーリング、占いなどが、成人女性たちを中心に人気を集めるようになった現象のことである。今日では、ブームもひと段落したが、衰退してしまっただけではない。むしろ、「スピリチュアル市場」として社会に定着したとも考えられている (有元 2011)。

「スピリチュアル市場」のなかで最近になって注目されるようになったのが、「子宮系」である。例えば書店では、健康や自己啓発、精神世界に関連する書籍コーナーに、「子宮」と題名にクレジットされた書籍が多く見られるようになった。これらの書籍は主に、ヨガや食事、体を温めるなど一般的な美容や健康にまつわる記事で構成されているが、文章のなかで「子宮」が神聖視されているのが特徴である。さらに、「子宮」そのものを最初から神聖視して、「子宮」は自分のあるべき姿や、進むべき方向を示すとする内容の自己啓発本も、ベストセラーとなっている。

ただし、「子宮系」は必ずしも好意的に受け止められているわけではなく、特にネット上では批判的な意見が目立つ。その理由として、「子宮」という臓器を取り上げながらも、非科学的、非医学的と言える主張が織り込まれていることが挙げられる。また、ともすれば「子宮系」が、「スピリチュアル市場」でしばしば見られるように、高額セミナーや資格取得のためのスクーリングへ誘導する役割を担っていることが少なくない。し

かし、こうした批判的な意見では、「子宮系」がなぜ今日の日本社会で女性たちの支持を受けたのかについて、必ずしも十分な検討がなされているわけではない。

本研究は肯定的、否定的な意見から距離を置き、「子宮系」そのものの内容に注目することで、現代日本社会における女性のスピリチュアリティのありようについて検討することを課題とする。

「子宮系」に注目する理由は、それが一過的な流行現象に見えながら、歴史的な経緯を見ると興味深い特徴を有していることが浮かび上がるからである。なぜなら、豊饒性の象徴として性器を神聖視する性器崇拜は、世界各地に存在しており、決して珍しい事象ではない。しかし、それは主に男性器が中心であった（倉石 2013）。他方、女性の生殖器たる「子宮」にむすびつく妊娠、出産、月経は、出血を伴うことから伝統的共同体のなかで「血のケガレ」として位置づけられてきた。「ケガレ」は、もともと死や病気から発生して、地域共同体を脅かす害悪を指す観念であった。

「ケガレ」という概念を用いて、月経と出産に大きく切り込んで論じたのは、文化人類学者の波平恵美子である。波平は、寺社での儀礼から女性が排除されることや、神聖とされる空間に女性が入ることがタブーとされている事例に注目している。そして、女性たちが排除されるのは、女性であることのゆえというよりは、月経や出産が「ケガレ」とみなされていたためであると指摘している。なぜなら、月経や出産はその役割からして生そのものというより、生と死の境界線上に位置するものであることから、「ケガレ」を呼び込むと考えられていたのである。月経のあいだに女性を隔離して生活させる「月経小屋」や、出産の前後を過ごす「産小屋」も、共同体において日常生活を送る場所とは異なる場所に作られてきた。さらに、食べるものや火にまつわるタブーが数多く設けられていたのである²⁾。もっとも、「血のケガレ」については、地域により、月経を祝う事例もあり、女性の生殖能力を賛美することがあった。

その意味で、月経や出産に対する文化的な意味付けは神聖性と不浄性という両面を有していたと思われる（波平 1984）。

しかし、中世以降、家父長制の拡大とともに「血のケガレ」の不浄性のみが強調され、社会的な女性差別を正当化する観念へと変化していった。したがって、波平によれば、「ケガレ」概念は月経や出産を「ケガレ」と見なし、「男性と女性の生理的相違を、社会的・文化的相違にまで引き上げ、しかも、その対立相違する男女の対応関係、相互依存の関係を制度的に表現」（波平 1984: 222）したもののなのである。波平の議論を言い換えれば、女性の月経や妊娠を「ケガレ」と見なし、共同体の下位に位置づけることで、共同体を円滑に運営する秩序を作り出してきたのだということである。

この構造を女性の側から見れば、月経や出産を司る自身の「子宮」は、自分の身体に所属する自己の一部ではなく、「ケガレ」として選別され、共同体による管理の下におかれるものであった。言わば、「子宮」とは宗教的な臓器であり極めて社会的な臓器だったのである。

こうした「子宮」に対する見方が変化したのは、近代に入ってからである。その変化には、医療が発達して、出産が医療化したことが大きいだろう。出産は共同体によって管理される対象ではなく、医師や看護師によって管理されるものへと徐々に移行していった（大林 1989）。また、月経は、生理用品の開発、発達によって、女性が自分で管理するものへと変化した（川村 1994; 小野 2000; 田中 2000）³⁾。こうして、出産や月経は私的領域のものとなり、医療化と個人化が進んだのである⁴⁾。

もっとも、「子宮」の個人化、私的領域化は1960年代以降になってより顕著なものとなった。出産をめぐるのは、病院で産むことがより一般的なものとなった。さらに、1970年代のフェミニズム運動においてウーマン・リブが主張した「産む、産まないは女が決める」とするスローガンが、中絶を含めて出産の選択権を女性自身が握るとい

う価値観を広めるのに一定の影響を及ぼした。特に、1994年にエジプトのカイロで開催された国際人口開発会議で採択された行動計画（カイロ行動計画）、「リプロダクティブヘルス&ライツ」（生殖に関する健康と権利）が打ち出されたことは、重要な出来事であった。この宣言は、妊娠、出産を女性が自分で決めるという内容のものであり、日本だけでなく世界の女性にとっての妊娠、出産のあり方に大きな影響を与えるものであった（上野・綿貫編 1996）。月経に関しては、紙の生理用品が飛躍的に発達したことも、そのあり方の変化に大きな影響を及ぼしている。月経は女性が個人的に始末するものであり、表に出すものではないという意識がさらに高まったのである。

ここまでの論点をまとめよう。女性の「子宮」は、月経や妊娠、出産を司る機能を有しているために、かつては宗教的な文脈に組み込まれ、制度的に管理される対象であった。伝統的な女性差別は、この「子宮」の機能をめぐる制度的、政治的な管理によって再生産され、現在までその一部は引き継がれていると言えるだろう。しかし、近代に入ると、このような状況は徐々に変化し、特に60年代以後は、月経や妊娠、出産を女性が自身で決めるという価値観が社会に本格的に広まってきた。

このような歴史的経緯を宗教社会学的な観点から検討すると、この変化は近代以降に、「子宮」の「世俗化」が起こってきたことを示すものと言えるだろう。「世俗化」とは、神聖性を基軸とする宗教や宗教的なものが世俗において解体していく過程のことを指す⁵⁾。しかし最近になって、神聖性を重視する動向が社会に再び現れていることは、これまでも指摘されてきた。したがって、近代の社会が「子宮」の「世俗化」をうながしたとすれば、「子宮系」の登場は、言わば宗教の世界で「世俗化」に拮抗する「再聖化」が現れていることに相当する動向としてとらえられるのではないだろうか。さらに、「子宮」の「再聖化」は、価値観がメディアやネットを通して共有されるこ

とで、「スピリチュアル市場」において顕在化し、広まったと考えられるのである。こうした「子宮系」の動向は、これまで起こってきた個人化や私的領域化と異なる流れのように見える。ただし、「再聖化」と言っても、共同体から、月経や妊娠、出産が単に祝福されるものとしてとらえられるようになったことを意味するのではない⁶⁾。

では、「子宮」を「再聖化」とするのはどのようなことなのだろうか。そして、なぜ「子宮系」が女性たちに受容され、広まったのだろうか。

「子宮」をめぐる長い歴史を振り返ると、「子宮」が「再聖化」されている現状に注目することは、現代日本社会において女性とスピリチュアリティとの関係について検討すべき課題を含んでいるように思われる。さらに、「子宮系」を検討することは、現代日本社会において、女性としてこの社会を生きる困難のありようを、あぶりだすことにもつながると考えられる。このような観点に立って、以下、「子宮系」の内容に踏み込んで検討する。

2. 「子宮系」と「子宮本」

すでに触れたように、「子宮系」は「スピリチュアル市場」で一つのジャンルとしての位置を占めている。しかし、その全体像をつかむことは容易ではない。なぜなら、「子宮」に神聖性を見出す「子宮系」は、「スピリチュアル市場」では各種のセラピーやヒーリングと結びつく形で広く浸透しているからである。また、SNSを使って「子宮系」を標榜するセラピストやヒーラーが、「子宮系」に関心を持つ女性たちと直接やりとりをすることも多く、変化が激しいことも理由として挙げられる。

そこで、本稿は「子宮系」関連の書籍に注目することにする。「子宮系」に関連すると目される書籍は、書店の自己啓発コーナーや健康コーナーに置かれていることが多く、中にはウェブに掲載されていたブログが書籍化してベストセラーに

なったものもある。また、書籍を分析、検討することは、「子宮系」が生まれてから現在までの変遷を検討することができる。すでに述べたように「子宮系」はウェブの影響が大きいですが、書籍でもある程度の方向性や傾向は検討しうると考えられる。

そこで、国立国会図書館の検索サービス(NDL ONLINE)で、「スピリチュアル・ブーム」が広まった2000年から2017年までの間に発行された書籍で、「子宮」が関連するトピックを書名に含むものを検索した。2000年代以前にも「子宮」がタイトルに含まれる書籍はあるが、出版数が少ないのと、「スピリチュアル市場」での「子宮系」を分析するために対象から除外した。

検索で浮かび上がった書籍のうち、具体的な病症を扱った医学書や、小説を除くと、「子宮」を表題につけている書籍は33冊抽出された。そのなかで、「スピリチュアル」な内容を含むものは32冊であった。執筆者の内訳としては、医師、助産師によるものが9冊、漢方医、鍼灸医によるものが5冊、ヨガインストラクターやダンサー、セラピストによるものが8冊、「子宮」ケアを専門とするカリスマによるものが5冊ある。「子宮」にまつわる情報を載せたムックが6冊であった。本稿は、その全てに目を通し分析、検討している。

3. 「子宮系」ムックの登場とその内容

ここではまず、ムックを取り上げたい。というのは、早くも2004年に「スピリチュアル」な情報も載せた「子宮」についての本を出版するなど、「子宮系」が広まるきっかけとしてムックが重要な役割を担ったと考えられるからである。

初期に出版されたものとして、20代から40代の主婦向けの生活雑誌『Saita』（セブン&アイ）が別冊ムックとして出版した『よくわかる婦人科のすべてbook——「子宮と卵巣」これで安心!』が挙げられる。このムックは表題からわかるように、婦人科で妊娠や出産だけでなく、「子宮」に

関わる病気を診察してもらうためのガイドブック⁷⁾である。具体的には、子宮の病気である子宮内膜症や子宮頸がん、無排卵月経などが、その症状や原因、さらには産婦人科医による治療法や手術法とともに解説されている。また、ムックには巻末に産婦人科医のリストや診療案内が掲載されている。さらに、「恥かしさや緊張感がない、『フツー感覚』が今の婦人科!」という題で、イラストレーターによる産婦人科での検査の様子をレポートした記事も掲載されている。こうしたムックの記事からは、今だに敷居が高いとされている産婦人科のマイナスイメージを取り払おうとする意図が窺われる。

他方で、医学的な情報に基づく記事が並べられているにもかかわらず、巻末では「カラダにたまった『悪い気』は追い出そう大作戦」という副題のもと、ツボ押しや体操の記事が掲載されていることも、このムックの特徴として挙げられる。具体的には、生理不順などを治すために「骨盤のゆがみを正し、子宮や卵巣の機能を高め」るための体操や、エッセンシャルオイルでのマッサージ、効果のあるツボの位置などが紹介されている⁸⁾。

ムックのなかでも中心的なものは、20代以上の女性向けの生活情報雑誌『オレンジページ』（オレンジページ）の別冊ムック『からだの本』シリーズだろう。このシリーズでは、4回ほど「子宮」についての特集が組まれている。

2013年に発行された第2号では、「女性ホルモン、生理、体調の揺らぎを整える 不調改善のカギは『子宮力』にあり!」というタイトルのもと、「子宮」についての記事が掲載されている。記事は主に産婦人科医や助産師へのインタビューで構成されているが、「子宮力」とは、脳と卵巣のつながりに着目して、ホルモンを整え月経の乱れや不調を回避する力であるとされている。その上で、漢方でいう血の巡りが悪い「於血」の女性は、「子宮にダメージを与える」ので、「子宮」を温める「温活」が必要などと記され、「子宮」を温めるツボや温湿布での方法が紹介されている。

他に、「子宮」を間接的に改善する方法も紹介されている。例えば、「温活」の一つとして、紙ではなく布を使用した布ナプキンが推奨されている。また、「自分と対話するために日記をつける」「笑ってすっきりする」といった、内面にアプローチする方法も示されている。さらに、このムックでは、古い師の愛新覚羅ゆうはんによる「インナー子宮風水」が掲載されている。その記事では冒頭で、「子宮は女性の体の中にある神秘的な〈桃のお宮〉」なので、それが不調をきたすと心身や運勢に不調を来すと述べられている。そして、それを改善する方法として、〈於血〉を改善する食事をとったり、水を飲んだりするほか、部屋の風水を良くする方法も書かれている。さらに、「負のエネルギーは子宮にたまりやすい！」という題で、人のせいにしたり執着したりしないように推奨する内容などが書かれている。このように、「子宮」を自分でケアする方法が、「スピリチュアル」なメソッドへと接続する例がムックには見られる。

ところですでに述べたように、「子宮」系ムックでは医学的な知識が多く掲載されている。そのなかで、月経の状態を改善して調子を整えることや、閉経を前にした更年期障害への対処の仕方などが、産婦人科医による解説をもとに紹介されているが、そのなかでも最も大きく扱われているのが、妊娠を目的とする記事である。そこでは、女性が高齢になると卵細胞の老化によって妊娠しにくくなるとされる、「卵子の老化」が産婦人科医によって盛んに言及されている。

『からだの本』の別冊ムックとして、2014年に『妊娠力が気になる人の漢方養生BOOK——子宮&卵巣を元気に！』が発行されている。このムックでも、「子宮」の調子を整えるための、漢方に基づいた「温活」のための食事の摂り方や、体操の仕方などが紹介されている。そのなかで、産婦人科医の原利夫による「妊娠力」についてのコラムが掲載されている。具体的には、晩婚化によって不妊治療が増加していることに触れ、最新の不

妊治療の紹介のほかに、「卵子の老化」も取り上げている。女性の卵細胞は生まれた時にある程度その数が決まっているが、加齢によってその数が減ってしまうことや、質が低下するために妊娠しにくくなるのが、日本産婦人科学会が提供するグラフと共に紹介されている。その上で、不妊治療には限界があることが繰り返し述べられている⁹⁾。

20代から30代の女性に向けファッション誌『Oz magazine』（スターツ出版）が2014年に出した別冊ムック『子宮力アップ&からだケアBOOK』では、「35歳で女子の子宮やカラダやライフスタイルはどう変わる？今から考えておきたい妊娠・出産のこと」と題した記事を掲載している¹⁰⁾。この記事の冒頭では、産婦人科医の池下育子が20代から30代の女性たちに妊娠、出産について講義する形式の内容が掲載されている。そのなかで、35歳から「卵子の質」や卵巣が低下するために、流産率や赤ちゃんの染色体異常が増えることなどが説明されている。また、続く記事でも産婦人科医の宋美玄が、さまざまなデータをもとに35歳が妊娠の目安であることを強調している。

他方で、こうした記事においても、例えば「妊娠力チェック」という題で、「恋愛なんて面倒くさい」「不倫に対して罪悪感がない」という意識だと「妊娠のハードルが高くなる」という内容が掲載されている。また、宋による妊娠、出産の経験によって、「子供を持つことは仕事にもプラスにしかない」「子育ては楽しい！」といったインタビューも載せられている¹¹⁾。

このように、「子宮」を取り上げたムックでは、産婦人科医などによる医学的な知識とともに、それとは異質な知識、読者が自分で「子宮」をケアするためのメソッドが並列して掲載されていることに特徴がある。また、「子宮」をケアするメソッドは、体を温めることが目的とされており、そのためのツボ押しや体操などがさまざまに紹介されている。そして、こうしたメソッドは自分の

内面性へのアプローチや、さらには「子宮」に神聖性を見出す「スピリチュアル」な性格を強く押し出したものへとつながっている。そして注目すべきは、医学的な知識が、「卵子の老化」を述べて、35歳が妊娠の目安であることを繰り返し強調している点である。「卵子の老化」という医師の情報が掲載されることで、「子宮」をケアするメソッドがより重要な意味を帯びる仕組みとなっているのである¹²⁾。

「子宮」を取り上げた書籍は他にも数多く出版されている。次に、それらの書籍について見てみよう。

4. 「努力型」としての「子宮系」

同じく「子宮」に神聖性を見出す「子宮系」といっても、その傾向には著作によって差異が見られる。ムックと異なり個別の専門家による著作は、その著者の傾向や性格がより直接的に現れるからと考えられる。そこで、そうした差異に着目し、ここからは二つに分けて検討していく。一つは、「子宮」の状態を改善するためのさまざまな努力が、「スピリチュアル」な価値観へと結びついていく「努力型」である。もう一つは、「子宮」に直接的に神聖性を見出すことで自分自身を肯定したり、運氣を呼び込もうとしたりする「開運型」である。まず、前者の著作について見ておきたい。

「努力」型では、「子宮」の状態を自分でチェックして、「子宮」の環境を整えたり改善したりする「努力」を行うことが重視されている。その具体的な方法として、食生活や生活習慣を変えることや、体操やマッサージを取り入れることが推奨されている。またここでも、「子宮」を温めることが重視されている。

「子宮」を温めるための総合的な情報を掲載しているのが、産婦人科医の池下育子が2013年に出版した『子宮を温め健康になる25の習慣』（新星出版）である。著書では「体が冷えてくると子宮が冷えていきます」という題で、子宮が冷える

ことが女性の健康や美容を損ねると主張されている¹³⁾。特に、冷暖房が効いた部屋や、エレベーターの使用による運動不足など、便利な生活が「冷え」を招くとしている。その上で、体操やツボ押し、薬膳料理などを紹介している。

他に、個別のメソッドに特化した書籍も数多く出版されている。薬日本堂が監修して、2013年に発行された「子宮力を上げる漢方レッスン」（KKベストセラーズ）では、漢方の考えに基づいて体質をチェックし、「子宮力」を上げるための食事のレシピなどが取り上げられている。他方で、この著作にも「子宮」の医学的な知識が掲載されているが、そのなかで現代女性は出産する回数が少ないため、生涯の月経回数が戦前の女性と比べて多く、「子宮は早くもお疲れモードです」と解説されている。著作の冒頭では「子宮力」について、「チューリップの球根」と同じように、「エネルギーが満ち溢れ、水分によってうるおい、大切な栄養がすみずみまで届けられる」ことによって力を発揮し、「美しく輝いた女性として花を咲かせるのです」と述べられている¹⁴⁾。

また、「子宮」に良い影響を与えるというヨガやマッサージを取り上げた書籍も、数多く紹介されている。例えば、ヨガ講師である仁平美香が2012年に出した、『子宮美人ヨガ——ホルモンバランスが整って心も体もキレイになれる！』（主婦の友社）であるが、仁平が独自に開発した「子宮美人ヨガ」のやり方が、DVDとセットになって紹介されている。このヨガを行う目的として、「しなやかな子宮」を手に入れて、不妊やセックスストレスを改善したり、美容や健康を向上させることが主張されている。また、「しなやかな子宮」のために布ナプキンを使うことも主張されている¹⁵⁾。

さらに、「子宮セラピスト」を名乗る井上清子が2016年に出した『おひさま子宮のまほう』（ワニブックス）では、タイの古式マッサージである「ディープチネイザン」をもとに、「子宮」をほぐすための体操や、また直接的に外性器を自分で見

てマッサージする方法が掲載されている。本文では、病気や心配事のある人の子宮は「ケアしてみると硬くて冷んやり」しており、『『さみしいよ』『悲しいよ』と、そんなふうにも訴えかけてくるようです』と表現されている。それに対して、「心身ともに健やかな人」の「子宮」は「ジュシー」「ピンク色」「みずみずしい」とした上で、「子宮を見れば“私たちの今”がとてもよくわかります」と表現されている¹⁶⁾。さらに、パートナーとマッサージしあう方法も紹介されており、「子宮」への働きかけが妊娠へとつながっていることも示唆されている。著者は、本書の最後で次のように述べている。

先が見えないとき、どうしていいかわからないとき、自分がちっぽけに見えるとき、そんなときは、どうぞ両手を子宮に重ねて、あたたかさを思い出してみてください。どんなときでも、子宮はずっとあなたに寄り添ってくれています。おひさまのようにあたたかな子宮=命が、「今ここ」に存在しています。そのあたたかさを、深く味わって、心地よさを思い出してみてください（井上 2016: 168）。

このように、「努力型」においては、ヨガや体操、食生活によって体を整えることが、結果的に「子宮」を健康にして、それがさらに自分自身の「女性らしさ」を引き出すという内容になっている。特徴的なのは、「子宮」についての表現だろう。「温かい」「やわらかい」といった子宮のイメージが体操やケアによる「努力」の結果として示されている一方で、ストレスにさらされた「子宮」は「カチコチ」といったマイナスイメージが付与されている。また、実際に自分では見られない内性器である「子宮」が、自分自身の状態を映し出しているとするのも、これらの「子宮系」の特徴である。

他方で、こうした「子宮」のあり様は、妊娠を目指すメソッドとしても設定されている。いわば、

妊娠に至る「努力」として「子宮」のケアが重視され、さらには「子宮」の神聖性が付与されると言える。次に、そうした「子宮系」のあり方について見てみよう。

5. 妊娠、出産を目指す「子宮系」

妊娠を強く押し出している「子宮系」のものとして、「ボディメイク 트레이ナー」を名乗る Micaco が 2015 年に出した『赤ちゃんを授かるふわふわ子宮体験』（双葉社）が挙げられる。同書では、骨盤の「歪み」を整えるストレッチが DVD 付きで紹介されている。冒頭で、骨盤を「第二の脳」と表現し、緊張や疲労がたまると「カチコチ」になるが、緩めれば「骨盤がゆりかご」になるなどと述べている。そして、その結果もたらされる「温かい子宮」が、赤ちゃんを育てるための「ふわふわの毛布」になると表現している¹⁷⁾。さらに、「おばあちゃん世代はなぜ子宝に恵まれてる人が多くいるの？」という題で、高齢者の世代では雑巾で拭き掃除をしたり、かまどで煮炊きしたりする厳しい家事労働に勤しんでいたため、骨盤の筋力が鍛えられていたので子宝に恵まれやすかったというコラムが掲載されている。この本の特徴の一つとして、「推薦のことば」という題で産婦人科医の浦野晴美がコラムを掲載していることが挙げられる。浦野は、骨盤を直すことで妊娠しやすい体がつくれるとした上で、お産もスムーズに運べると述べている。

他方で、妊娠、出産を目指して「子宮」をケアするために、体操や食生活だけでなく、生活そのものを全面的に改めることを主張する本も出版されている。2012 年に「野草料理研究家」を名乗る若杉友子が出版した『子宮を温める健康法——若杉ばあちゃんの女性の不調がなくなる食の教え』では、できるだけ「自然」に近い生活の仕方が推奨されている。同書の冒頭で若杉は、肉や乳製品、卵を排し、独自のルールで食事を作る「マクロビオティック」の創始者である桜沢如一の本

と出合ったことをきっかけに、それをもとにした「野草料理」を開発したとしている。そして、田舎では都会から来た女性たちが食べ物で子宮が元気になる、妊娠へと至ったことに触れて、食事を雑穀中心に切り替える、調理に圧力鍋を使わないといった食生活の改善が、「子宮」を温める効果があるなどと述べている。

若杉はさらに、生活態度が「子宮」に悪影響を及ぼすことをさまざまに論じている。膣の分泌物であるおりものについて「昔の女性はおりものなんて出なかった」と述べ、最近の女性におりものが多いのは「子宮の中が荒れているから」と主張している。また、若杉は月経について次のように述べている。

女性はお嫁さんにいくと「おかみさん」と呼ばれるでしょう？それは「神さん」だから、女性には子宝を宿す子宮があるの。子宮は「子の宮」だから、妊娠すると赤ちゃんは「参道」を通して生まれてくるのよ。参道は神社にあるでしょう？その神聖な子宮のパロメーターが月ごとにやってくる生理（月経）です。女性は「月の氣」を受けているので、29.5日のサイクルで生理が来ます。「氣」とは自然界に存在する命の源のようなもの（若杉 2012: 23-24）。

また、戦後の食生活は欧米の「洗脳」によって押し付けられ、乱されるようになったと主張した上で、肉や牛乳が食生活に登場したことでタンパク質が過剰になったと述べている。その結果、子どものアトピーや大人の花粉症が増大しただけでなく、少子化もその影響によるものだと述べている。さらに、「子宮」を温めることは妊娠、出産という目的を意識することであり、「妊娠できないのはどこか不調」であることに気づく必要があると述べられている。また、自身の娘の体験から、食事を変えれば、お産も軽くなるし、母乳で赤ちゃんを育てられるようになるなどと主張してい

る。若杉の著書は、妊娠、出産をスムーズに行ってきた「昔の女性」がモデルとして全体に貫かれている。

「自然」な妊娠、出産のためには「子宮」を温めることが有効だという主張と、「子宮」を神聖視することとを強く結びつけた著作は、産婦人科医によっても執筆されている。産婦人科医の進純郎が2014年に出した『子宮力』がその例である。本書では、「子宮」の仕組みや妊娠、出産の過程、病院での検診の受け方などについて解説する他、「子宮」や胎児を守るために「冷え」を避けて体を温める方法から、レトルト食品を避けて「一汁三菜」を摂ることや、さらには腸内環境を整えることが推奨されている。また、「子宮」は月の満ち欠けと関係しており、「宇宙と交信」している臓器だという主張も展開されている。

著者の進純郎は本書で、「自然分娩」こそ「子宮」にふさわしいあり方であり、「出産力」は「子宮力」の一部であるという主張を展開している。そして、陣痛促進剤や器械分娩、無痛分娩、帝王切開を批判し、「子宮」の本来的な力として次のように称えている¹⁸⁾。

自分の持つ「子宮力」を最大限に発揮して、お産に臨んでください。自然なお産は必ずしも楽ではないかもしれませんが、苦しみがあるからこそ喜びは2倍にも3倍にもなります。「私にできるかしら」と心配せず、まずは挑戦してみましょう。現代人が忘れかけている努力や辛抱などが、人間が生きていくために本当は一番大切だということが理解できるはずですよ。子宮を有することに誇りを持ち、子宮力を発揮できる機会を与えられたことに感謝し、自然なよいお産に臨んでくださることをこころより願っております（進 2014: 141-142）。

以上のように、「子宮」のために生活や意識を変えられることが、「子宮」のもつ力を高めることに

つながると主張するのが、この種の妊娠、出産を称える著作の特徴である。出産をこのように称えることは、「子宮」を神聖視する傾向をもたらす。

こうした著作では、「昔の女性」を称揚する傾向が見られるのも、一つの特徴である。「昔の女性」は、「子宮」に良いとされる生活を送ることで、現代の女性よりも妊娠、出産がスムーズに達成できるとする主張が繰り返されている。その反面で、便利な生活を送る現代の女性のあり方や、器具や薬品を使う出産が批判的に見られている。このように、「昔の女性」を理想として称えることは、昔の日本のあり方をも称揚することにも通じることに留意する必要がある。

もちろん、同じく「子宮系」を取り上げる言説のなかには、生活改善を勧めたり「昔の女性」を称揚したりするのは異なる「子宮系」も見いだされる。それが、「開運型」の「子宮系」である。次に、「開運型」について見てみよう。

6. 「開運型」の「子宮系」

「開運型」の「子宮系」の中心にいるのは、ブログをきっかけに人気を博するようになった「子宮委員長はる」である。「子宮」に神聖性を見出すことを強く主張する「子宮委員長はる」のブログが人気を呼び、それを書籍化したものがベストセラーとなるなど大きく支持を受けている。また、はるは定期的に講演会を行ったり、個別の依頼者に対してセッションを行うなどして、カリスマ的な人気を集めてもいる¹⁹⁾。

「子宮委員長はる」は、2015年に出版した『子宮委員長はるの子宮委員会』の冒頭で、「本当の自分の声」を「子宮の声」と表現し、それを聞けば結婚や子育て、お金など「すべてが驚くほど、うまく回り出す」と主張している。その主張は、自身が周囲に認められなくて働きすぎ、精神疾患だけでなく子宮筋腫などの病気にかかった体験から来るものだという。そして、自分を中心に生きることの大切さを説き、そのためには「子宮」に

耳を傾けることが大切だとする。また「子宮」に耳を傾けることは、仮に病気で「子宮」を摘出した場合でも可能であるとも述べられている。

具体的な内容では「素直に生きる」「自分を愛する」「嫌なことに耳をかさない」などといったことが自身の体験をもとに列挙され、これらが「子宮」の声なのだと言われている。また各章の最後には、「愛されたい！って素直に言えるから、愛されるんだよ by子宮」というメッセージを大きな文字で強調している。さらに、「子宮」の声を聴くことは自分にとって、「欲望まみれの腹黒い人間」であることを認めるためだという。

著者は、「子宮」のケアの仕方にも触れている。例えば、自身が「子宮」の病気にかかった時、不調を治すために「温活」に取り組んだと述べている。ただし、「子宮」が冷えるのは、自己嫌悪や妬みなどの「トラウマ」が「子宮」の血流を悪くするからであり、「子宮」を温める過程ではその感情が表に出てきて、自分を苦しめたという。また、月経について、カレンダーが男性に合わせたものとした上で持論を展開している。

本来、女性の休日は、土日ではなくって“月経中”なんですね。この月経周期は、月のリズムに連動しています。子宮と宇宙は連動しているんです。自分自身の意志ではコントロールできない力に、影響を受けているんですね。もう月に、月経に、子宮に委ねちゃいなよ！by 子宮（子宮委員長はる 2015: 170-171）

こうした意識は、独自の家族観と連動している。はる自身は別の男性とのあいだに産まれた子どもとともに、現在の夫と暮らしている。そのことについて、はるは子どもを産んでも自分を中心にすべしと主張し、「母性」に縛られることを否定したり、ネットで自身に「母親」の規範を押し付けてくる相手を「寂しい人」と表現したりしている。夫に対しても無理に尊敬するのではなく、暴言も

吐けることがより良い関係を作るとしている。さらに、自身の「子宮」を中心とするセックスが、相手との理解を深めるとも述べている²⁰⁾。

こうした考えに至った背景として、自身が母親の喜怒哀楽に振り回される「呪い」にかかっていたためと述べた上で、「呪いを解くのは自分自身」であり、子育てもまた「子宮」に基づいて喜怒哀楽を表現した方が「呪い」が解けると主張している。自分が妊娠している時は、胎内にいる子どもと「胎話（たいわ）」することで、「より幸せにするサインを母のそばで発す」ために生まれてくることに気づいたからと述べている。はるはこの考えを、子どもは胎内にいる時の記憶を持って生まれてくる「胎内記憶」を持っていると主張する産婦人科医の池川明の著作から学んだと述べている²¹⁾。他方で、2017年に出した『女の幸せは“子宮”で決まる！』（角川書店）では、母に影響を与える「父の呪い」が女性にとって盲点であることも指摘している²²⁾。

はるの主張で特徴的なのは、妊娠、出産もまた自分を中心に考えるよう推奨している点であろう。感情が「子宮」に溜まると妊娠しにくくなると述べながらも、「赤ちゃんが来なくてもまず自分とのパートナーシップを築き上げること」が大事だという。また、妊娠中は「子宮」のまわりに自分のマイナスの感情が粒となった「カルマ粒」が現れ、やがて吐き出される。だから、出産はマイナスの感情を吐き出す機会でもあるという独自の妊娠、出産観を表明している。しかも、ネガティブな感情を否定するのではなく、妊娠中に「自分の感情を感じて、「自分自“神”」であることが重要であるという。さらに、このように「子宮」の声に忠実に従ってお金を使い、循環させることで、お金が入ってくるとも述べている。

7. 「子宮系」とは何か

ここまで、「子宮系」について「子宮」を表題にした図書を手掛かりに検討してきた。では一体、

「子宮系」と何か？それは何を志向するものなのか？以下ではこれまでの検討を整理することから、この問題についてあらためて考察する。

「子宮系」への入り口の役割を担ったムックは当初、臓器としての「子宮」の健康など医学的な情報を主としていた。だが、次第に「子宮」を自分でケアするメソッドへと重心を移してきた。その具体的な内容が、生活環境を見直すことや、「子宮」を温める「温活」である。こうしたメソッドは、「子宮」を神聖視する方向へも発展していった。他方で、「子宮」に働きかける目的として、妊娠、出産を重視する方向が現れて、そこでは産婦人科医が重要な役割を担っている。

単行本としての「子宮」本は、「努力型」と「開運型」の二つのグループからなる。まず、「子宮」に働きかけて美容や健康、さらには生き方も向上させることを志向するのが「努力型」であるが、そのなかでも、特に漢方やヨガ、マッサージなどを取り上げた著作が多い。このグループでは、特に目に付くのは、「エネルギーが満ち溢れた」「しなやかな子宮」「ジューシー」「みずみずしい」といった表現が、「子宮」に与えられているという特徴である。これは、「子宮」をその人の精神状態を映し出すものとしてとらえる志向性を示すものといえよう。

「努力型」のなかには、妊娠、出産に焦点化して「子宮」をとらえるものも見いだされるが、これらにおいては「子宮」をお宮に喩えたり、月の満ち欠けと直接結びつけたりするなど、「子宮」を神聖視する傾向がより強化される傾向が窺われる。同時に、「昔の女性」を見習うことが、妊娠やスムーズな出産につながるとする論調も見られ、そこには復古的ナショナリズムの志向性さえ潜在していることがうかがわれる。

もう一つのグループ、「開運型」の「子宮系」は、「子宮委員長はる」の著作が主たる担い手となっている。はるは、「子宮」は自分の感情や本音が溜まる場所であり、それに耳を傾けることで運を呼び込むことを主張している。「温活」も推

奨しているが、それは「子宮」に溜まった感情や本音を解放するためであり、そのことで自分を愛することができることも著者はいう。さらに、妊娠は自分を中心に幸せを作り上げるためのものであり、「カルマ粒」など独自の「子宮」観が呈示されている。はるはまた、「子宮」を通してこそ女性によりよく生きると主張する。ただしそれは、「母親」として生きることではなく、あくまで自分を中心として生きることである。

ところで、先に「子宮」は近代以後、私的領域化や個人化という形で、いわば「世俗化」をたどってきたが、それから「再聖化」の方向に転じようとしているのではないかという仮説に触れた。では、最近における「子宮系」の登場は、この「再聖化」とどう関わるのであろうか。ひと口に「子宮」の再聖化と言っても、「子宮系」からは二つの方向性が見えてくる。

一つは、「子宮」を意識した健康法や生活改善のためのメソッドが美容や健康につながり、さらにそれが「子宮」の神聖視へと向かう流れである。この場合、「子宮」は再聖化それ自体が自分に変化をもたらすのではなく、自分を労わる結果として神聖性がもたらされるとされる。ただし、妊娠、出産を重視する「子宮系」では、母親となることや、子どもを産む体験そのものに神聖性が付与されている。さらに子どもを産み母親となることが、ナショナリズムへとゆるやかに接続する傾向さえうかがわれるが、両者をつなぐのが、妊娠、出産を当然のこととしていた「昔の女性」のイメージなのである。

この「子宮」の「再聖化」においては、述べたように産婦人科医が積極的に関わっている。彼らは「卵子の老化」という主張を基に、35歳までに妊娠、出産することの必要性が読者に説かれているが、それは、「スピリチュアル」なメソッドの必要性や、それによる「努力」の価値をより強調する役目を担っている。それだけでなく、妊娠、出産を通して「子宮」に神聖性を付与する役目も担っているのである。

「開運型」では、当初から「子宮」を神聖視し、そのことで自分自身や、自分自身の「女らしさ」を肯定する傾向が見られる。「温活」はもっぱら、「子宮」に神聖性を付与するための手段の一つにほかならない。また、「子宮」に神聖性を付与することで、自分自身をも神聖視するのも、「開運型」の特徴である。他方で、妊娠、出産が肯定されているものの、母親となることは神聖視されていない。あくまで、一人の個人として、女性である自分自身が、重視されているのである。また、「子宮」に付与された神聖性は、お金が入るといった即物的な価値観とも連動していることも特徴点の一つである。

以上は、諸著作物における言説を手掛かりとした「子宮」の「再聖化」についての検討から見てきたことであるが、「子宮系」がなぜ今日の女性たちに受容されているのかを彼女らの視点からとらえ直すと、現代日本社会における女性たちの立場が浮かび上がってくるように思われる。

「子宮系」は、そもそも「子宮」の病気を予防するための情報から始まっており、産婦人科医と密接に関わっているのもそのためである。かつては、女性が「子宮」の健康について表立って情報を手に入れることは難しかったが、ムックをはじめとする書籍は容易に手にすることができるため、需要があったことと推測される。そして、そうした「子宮」の情報は、自分自身で「子宮」をケアするメソッドへと接続していき、やがては神聖視する方向へと向かった。

このように考えると、今日における「子宮系」の広がり背景には、自身の健康を取り戻すこと、生活リズムを改善することを模索する女性の想いがうかがわれる。すなわち、「子宮」の健康を軸とすることで、女性としての健康を損なうような生活を見直したいという願望が今日の女性たちの間で強まっており、それゆえに「子宮系」が広く支持されるようになったということである。そして「子宮系」の広がりにはまた、タイミングを見計らって妊娠、出産に挑まなければならない現代の

女性たちの姿をも映し出している。なぜなら「子宮系」は、妊娠、出産に向かって、いつそのタイミングがきてもスムーズにことを運べるようにすることが目指されているからである。

同時に、「子宮系」は保守的とも言える価値観を強化する方向に向かっていることも見逃すことができない。一つは、妊娠、出産を経て母親となることそれ自体の全面的な肯定である。ここでは、母親となることや「母性」そのものが、過剰なまでに明るく、かつ前向きに肯定されている。さらに、それは日本という国家に貢献することさえも、示唆されているのである。そして、ここではパートナーであるはずの男性、すなわち父親の存在は非常に影が薄いことも指摘される。

以上のような「努力型」に対して、「開運型」は母親になるという価値観に対して、まったく反対の主張が展開されている。すなわち、子供を産むのは自分自身のためであり、母親となることをことさら重視する考えはむしろ忌避されている。「開運型」の中心である子宮委員長は、SNSなどで批判を受けることが多いが、その理由の一つはこのことと関わっているだろう。だが「開運型」が、支持を受けるのも、同じ理由からである。

そして、ここでも、保守的とも言えるべき「女性らしさ」が過剰に肯定されていることも見落とすことができない。「女性らしさ」をあえて強化することで、より強い存在となることが主張されているのである。

以上の点から考えると、「努力型」は母となることを神聖視し、「開運型」は「女性らしさ」を神聖視しているという違いも指摘される。ただし、「母」となる過程において男性が遠景に置かれているのは両者に共通することである。すなわち、男性は前者ではほとんど言及されておらず、後者では女性のわき役として位置づけられている。そして、「努力型」においても「開運型」においても、産婦人科医が重要な役割を果たしていることも指摘される。こうした特徴から、「子宮系」は産婦人科医療と不可分な関係にあると言える。

ただし、「子宮系」はあくまで情報として提示されているにすぎないことに注目する必要がある。読者の立場に立つと、「子宮系」のなかから目的やライフスタイルにあわせて自由に取捨選択をしたり、適宜組み合わせたりすることが可能なのである。言い換えれば、「子宮」に神聖性を付与するものであろうと、それをどう受け取るかは読者の自由に委ねられているということである。「子宮系」がネットなどで話題になりながらも、具体的な消費者像をとらえにくいのは、このことと関わっていると考えられる。しかし、逆に言えば、「子宮」を「再聖化」という世界観を共有しつつも、個人を中心とする「子宮系」が台頭している現象は、現代日本社会において、女性独自のスピリチュアリティの世界が生成されつつあることを端的に示していると言えるのではないだろうか。

6. おわりに

「妊娠、出産は自分で決める」というスローガンが広まってからも、妊娠、出産が女性にとってどのようなものとして位置づけられるかは、フェミニズムの中でもさまざまに論じられた。だが、これらの議論が収束していく先ははっきりと見えていくわけではない。他方で、育児環境や労働環境が改善しない社会において、女性にとって妊娠、出産はいまだに人生を変えざるを得ない大きな決断である。「子宮」を神聖視する「子宮系」が、「スピリチュアル市場」のなかで一定の支持を集めているのは、ある意味で必然的なことと言えるのではないだろうか。その流れにおいて、産婦人科医療が重要な役割を担っているのは、これまで指摘した通りである。

「子宮系」は表面上の流行ではなく、女性の葛藤とスピリチュアリティの関係性をめぐって長年に渡って争われてきた問題が噴出したものともいえる。フェミニズムの動向との関係も見落とすことができない。こうしたことを含めて、女性とス

スピリチュアリティを巡る事象には、依然として多くの検討すべき課題が残されているのである。

注

- 1) 「系」とは、何らかの系統だったシステムを指す言葉であるが、ここでは「子宮」を中核として関連する事象（器官を含む）という意味で「子宮系」が使われている。本稿も、「子宮系」を議論において使用する。
- 2) 特に、民俗学、文化人類学では、伝統的な共同体が月経を不浄視し、祓い清める対象としてきた歴史を明らかにしてきた。「赤不浄」の考えや、月経の際に女性を隔離する「忌屋」「月経小屋」を設ける慣習、食べ物、火といったものにまつわるタブーなどが取り上げられている。(瀬川 1980)
- 3) 具体的には、明治期にゴム引きの商品が登場したことや、1960年代から紙ナプキンが普及してきたことなどの歴史的な経緯が取り上げられている(小野 2000; 川村 1994)。
- 4) 天野正子と桜井厚は生理用品の発展の背景として女性の社会進出などを指摘した上で、「女性たちが積極的に自分の生き方を見つけはじめる動きと、自分にあった生理用品を求め使おうとする動きとは、みごとに関連しあっていた」(天野・桜井 1992)と指摘している。
- 5) 「世俗化」については、その過程についてさまざまな議論がなされている。例えば、トーマス・ルックマンによる議論を参照されたい(Luckmann 1967=1976)。
- 6) 「再聖化」については、西山茂(西山 1988)による議論を参照されたい。西山は、「現代宗教のゆくえ」のなかで、現代日本社会においては、世俗化のあとにも神秘・呪術的な宗教性は重要な要素であり続けると指摘した上で、世俗化とともに再聖化が続くと指摘している(西山 1988: 211-228)。
- 7) 2004, pp52-65.
- 8) 2013, pp8-41.
- 9) 2014, pp8-50.
- 10) 2014, pp93-101.
- 11) 他方で、産婦人科医による「子宮系」への批判も目立つ。例えばウェブメディアのbuzzfeed medicalは、産婦人科医である佐藤ナツの「じわじわとスピリチュアルに侵食されていく私たち」というコラムを掲載している。佐藤は「子宮」が冷えることはなく、非科学的であるとして「スピリチュアル」を批判している。他方で、「子宮系」の内実には言及が不十分であり、「スピリチュアル」「カルト」という概念もあいまいに使われている。(https://www.buzzfeed.com/jp/natsusato/spiritualmama 最終閲覧日: 12月9日)
- 12) 日本産婦人科学会や日本生殖医学会は、例えば高校生に向けた保健体育の啓発教材に改ざんした「女性の妊娠しやすさの年齢変化グラフ」を掲載するなどして、若いうちに妊娠、出産させる言動を活発化させている。そのなかで、「卵子の老化」も強調されてきた。この経緯については、「文科省/高校『妊活』教材の嘘」(西山・柘植編 2017)を参照されたい。
- 13) 2013, pp24-26.
- 14) 2013, pp14-32.
- 15) 生理用品に布を使うことや、その結果として月経の排泄が自力で行えるという主張は、疫学者である三砂ちづるの著作から影響を受けたと考えられる。2000年代から「子宮系」が台頭してきたのも、三砂の著作がベストセラーとなったことも影響している。そのなかで、フェミニズムが否定されると同時に、スピリチュアルが肯定されていることにも注目する必要がある。詳しくは三砂(2004)を参照されたい。
- 16) 2016, pp42-45.
- 17) 2015, pp10-17.
- 18) 助産やその周辺の事柄について取り上げた雑誌「助産雑誌」(医学書院)からは、一部の産婦人科医や助産師が、器具を使った分娩や帝王切開を否定して、「自然」な出産を重視している傾向が見られる。また、「自然」という言葉が、神聖な意味を帯びている場合もある。
- 19) 子宮委員長はるがネットで批判されたもう一つのきっかけのとして、「ジェムリング」と呼ばれる、特殊な力を持つとされるパワーストーンを膣に入れる方法を紹介し、通販を行っていたことが挙げられる。また、独自のセッションなどで高額の料金を取っているのも、批判されている理由であると考えられる。「スピリチュアル市場」における金銭の問題については、別の機会に検討したい。
- 20) 2015, pp121-145.

- 21) 「胎内記憶」は、子どもたちの一部が持つと主張されている、生まれる前の母親の体内での記憶のことを指す。2014年から上映されているドキュメンタリー映画「かみさまとの約束」をきっかけに注目され、広まった。
- 22) 2017, pp75-79.

【参考文献】

- 天野正子・櫻井厚, 1992, 『「モノと女」の戦後史——身体性・家庭性・社会性を軸に』有信堂.
- 有元裕美子 2011 『スピリチュアル市場の研究——データで読む急拡大マーケットの真実』東洋経済新報社.
- 倉石忠彦, 2013, 『身体伝承論——手指と性器の民俗』岩田書院.
- Luckmann, Thomas, 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, New York: The Macmillan Company. (=1976, 赤池憲昭訳『見えない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社.)
- 三砂ちづる, 2004, 『オニババ化する女たち——女性の身体性を取り戻す』光文社.
- 波平恵美子, 1984, 『ケガレの構造』青土社.
- 西山千恵子・柘植あづみ編, 2017, 『文科省／高校「妊娠」教材の嘘』論創社.
- 西山茂, 1988, 「現代宗教のゆくえ」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣pp.211-pp.228.
- 小野清美, 2000, 『アンネナプキンの社会史』宝島社.
- 田中ひかる, 2013, 『生理用品の社会史——タブーから一大ビジネスへ』ミネルヴァ書房.
- 大林道子, 1989, 『助産婦の戦後』勁草書房.
- 島蘭進, 2007, 『スピリチュアリティの興隆——新霊性運動文化とその周辺』岩波書店.
- 瀬川清子, 1980, 『女の民俗誌——そのけがれと神秘』東京書籍.